巻頭特集

2022年夏、深谷に降ってきたもの

― ドキュメント6.2降雹被害 ―

6月2日（木）夕方に埼玉県北部を襲ったゲリラ豪雨と降雹は、農作物や農業用施設、家屋、自動車など大きな被害をもたらし、被害見込額は深谷市内だけでも農家戸数300戸約12億円、施設178棟約2億円のという。となりの畑がなんともなかったりする、局所性も人々を驚かせた。
2022年夏、深谷に降ってきたものがもたらした現象を、人々のコメントでドキュメントする。担当は議員ライター・小林真。　（団体名などは通称です）

6/2 木

「残業で市庁舎にいました。ゲリラ豪雨と思ってたらバラバラ音がしてきて、大粒ではなかったけどたいへんな地域もありそうだと…。すぐ職員の現場検証のチーム編成などの準備をしましたが、平成26年豪雪を知る職員の経験が生きましたね。翌日は7時半出勤でした」（農業振興課・松本さん①）

「深谷テラスと花園フォレストへ遊びに行き、帰りに寄ったオザムから出ようとしたらいきなり暴風雨。すると車体にゴンゴンと大粒の雹が大量にあたってきてこわかった。15分くらいだったでしょうか。雹がやんでもタイヤ半分くらい冠水してて、1時間立ち往生でした」（群馬のまりさん②表紙左側の手のひらの雹粒撮影）

6月2日のこの時間にどこでなにをしてたか、深谷の人々は何度も話題にするだろう。

「こんなの生まれて初めて」「90歳のおじいちゃんも、こんなのなかったって」

当日のSNSには、大量の画像・動画が驚きのコメントとともにアップされている。そして投稿者の多くは、自分のタイムラインをみてさらにびっくりした。夏に迷い込んだ雪国と言おうか真っ白な道路、ゴルフボール大の光る雹粒…。20分ほどで深谷に大きな傷あとを残した固体群は、6月の夜の熱気でまもなく消えた。

「馬の背を分ける、ってゆう通りだいね」

6/3 金

議会開催中のこの日に複数の議員が口にしたように、被害は局所的だった。児玉地域も含めひどかったのはおよそ上越新幹線沿い。雷雲は強い電気に引き寄せられるという人もいる。※1

榛沢で農業を営む角田義徳議員③は、市議24人中もっとも雹害に近い。

「うちですか？だいぶやられましたよ。地区全体の被害はまだ調査の段階です」③

角田さんはその午後、現地視察の小泉龍司衆議院議員に同行。知事や県議、メディアも続々と深谷入りした。

「夕方、畑で呆然としてたら、日テレの取材の人が飛び込みで来たんですよ。1000万見込んでた売上がゼロになるかも、って時でそう答えました。一度ニュースに出たら、法人で取材しやすいのか次から次に取材が来る。じゃあ、転んでもタダでは起きないっていうか、何かつかめればと思ってすべて応じましたよ」（榛沢新田のヤマニファーム・山田豪さん④表紙右下は直売店で）

山田さんは全国ネットテレビ3局5番組と新聞1紙の取材を受けた。

「4日の角田さんのSNSに、できることがあれば、ってメッセージを送ったら、困ってる生産者がいますと相談があったんです」

6/5 日

（普済寺の青春市場・内田貴志さん⑤表紙左側はコスモス街道沿いの直売店で）

もともと自称「もったいない同盟」として、規格外の農産物を消費者に届けるのが青春市場。固定ファンは多い。

「大きなところが無理ならまず個人事業主が動かないと、角田さん紹介の生産者さんのB品を小鹿野の取引先に納入して救助大作戦が始まりました」⑤

内田さんは6月中に約1万9500本のとうもろこしを運んだ。

「なんとかしてくれるまで待ってられない。だから自分で回ってて、今も行田の帰りなんです」（沓掛のスマイルファーム・萩原友美さん⑥）

6/7 火

ナースから農家へ7年前に転職した萩原さんの味来は、わたしが初めて食べた「訳アリとうもろこし」となった。夫の実家で始めた農業は楽しく農村社会になじみ始めたが、ひっかかりもある。

「いっしょにやっていこうっていう感じがあまりない気がするんです。今回にしても、出荷できない分は加工や飼料用として引き取るとか。わたしはSNSで困ったっていえるけど、JAに出すしかないおじいちゃんの農家は多いですから。販路は分散しなきゃと思いました」⑥

この日までにJAは特例として「果実内部まで被害を受けているものを「別送り（2段階）」や「B品」としての出荷を決定。しかし、上位別送りでも価格はA品の半額以下という。

この日深谷市は、雹被害農家支援のガバメントクラウドファンディング※2をスタートした。

6/9 木

「半値じゃなく正規の価格で買ってくれる事がホントの応援な気がします」（戸森の農家・とまるよしゆきさん⑦）

生産者からのSNS投稿。多くの他生産者から賛同のコメントが寄せられ、消費者からは気づかされたという声が多かった。

「正規の価格で半分の量を売る方が、半値全量販売よりコストもかかりません。農家はその方がずっと助かることを、知ってほしいんです」⑦

上野台の産直店とんとん市場は「被害品」と明記しつつ通常価格で販売。県外にも店舗を持つベルク、コープみらいでも応援セールが行われた※3。

この日から深谷市役所本庁舎では、JA各社が1箱13本入1200円の「訳アリ深谷産とうもろこし」を販売。新名所レンガコリドーの長い行列が17号国道走行車の目を引き、17日までの9日間で4612箱が消費者に届いた。

「市は販売はできませんから、場所を提供するだけなんです。これから時間をかけて、支援の方法を探っていきます」（松本さん①）

6/11 土

「行列や渋滞の写真ですか？てんやわんやで、撮ってる時間なんかないですよ！」（道の駅おかべ・坂本さん⑧表紙左下はスタッフと）

同店は当初予定の「岡部のとうもろこし味来祭り2022」をタイトル変更した「ガンバルベフカヤサイ！」を開催した。開店前からの大行列に10時の販売開始を1時間繰り上げたが、車の渋滞は一時深谷市をほぼ横断して熊谷市の別府沼公園あたりに迫るほど。週末の通行車は悲鳴を上げ、ニュースにも取り上げられた。

「暑い中の行列からアイスコーヒーの注文も多かったです。長い時間店の前にいるしかないから、名前のアピールにはなったかも知れません」（あさみ珈琲店・浅見さん⑨）

駅内の他商品も売れる。同じ岡部、約4キロ以上離れた榛沢地区でも、「畑から拾い出したのをまた選別して、売り出したのが10日。とくに11～12日はお客さんがどんどん来て、開始すぐ売切れの状態でした」（山田さん④）

その後

「農家ばっかりってよくいわれるんだけど、産業を守るため、次期作の支援なんです。そこをわかってほしい」（要旨抜粋）

6月議会角田議員への答弁で小島市長が発言したように、被害は広範囲だ。とうもろこしのほかナスやねぎ、小麦、花や畜産農家のハウスも大きなダメージを受けている。窓ガラス破損で休校があり市町支給のビニールシートが即座になくなった本庄や上里の方が家屋や自動車が受けた損害はきびしかった。

そんな中深谷のとうもろこしが全国的に注目されたのは、旬寸前のタイミングとこれまでに培ったブランド力ではないか。昨年の大河ドラマや秋オープンのアウトレットでの深谷ブームと関係なくないし、シンボル的品種「味来」のチャーミングなネーミング効果もあるだろう※4。

災害の少なさがセールスポイントだった埼玉県北深谷。この10年で平成26年豪雪、令和元年東日本台風と自然災害が続いている。グローバルなコロナもあって、危機続きだ。そんな中、2022年夏、深谷に降ってきたものから学ぶことがあるとすれば何だろう。

「検査で出荷は難しいっていわれて、すぐうなっちゃった高齢の農家も少なくないみたいです。SNSなんかで情報交換できない世代は、しっかりサポートしないとですね」（内田さん⑤）

「生産者がほしいのは栽培支援。全国の産地で雹害で作物がどうなって、どんな対策が有効かのデータがほしいですが、種苗会社もJAもおしえてくれません」（とまるさん⑦）

あらためて表面化した出荷規格は、以前から指摘されつつ解決されない課題のひとつ。いずれもオープンな情報共有がカギだから、アグリテック※5やデジタル田園都市※6の戦略にマッチするし、実装にはアナログで身近なコミュニケーションが必須だから、地域＝まちづくりの力が期待される。

この号が発行される頃には、味来ブランドにこだわる山田さん今年度の生産・販売が終わっているはずだ。

「最終的に売上500万以上にはなりそうです。たいへんでしたけど、テレビに出たことでずっと買ってもらってるお得意さんからも初めて来た人からも、がんばってって栄養ドリンクとかの差入れや手紙が来たんですよね。落ち込んでられない、前を向かなきゃって思えました。ありがたいです。

なんで味来にこだわるか？　ずっと岡部で育った品種だし、これにかぶりつく子どもの顔で力が出るんです」（山田さん⑤）

何が起こるかわからない。でも、わかっている未来なんてない。だから深谷とうもろこしに大きな口を開けてかぶりつける、2023年の夏も待ち遠しい。

深谷テラスパークで19日、角田議員と同級生、角田さんの販売は10時から100箱1時間で完売

←ヤマニファームの POP

上・中）道の駅おかべ、下）市役所のとうもろこし行列は「降ってきたもの」がもたらした思ってもみなかった光景

降ってくる直前。「15時くらいから、地元若手農家が集まって収穫直前の畑を前に、和気あいあいと今季の出来具合を話していたのに…非常に残念です」（角田さんSNS投稿）

川本の週末農家さんは畑の帰りにトラックで動けず。荷台にあった粒

群馬のまりさんが立ち往生中撮影の冠水した南大通り

とんとん市場のPOPは被害痕を明記

スマイルファーム産の雹の痕

道の駅おかべとなり中宿歴史公園の古代蓮にも穴があいた

【脚註】
※1　とまるさんが年配の農家から採話。雷雲は高圧電流に引き寄せられることが多く、たとえばかつて雷多発の矢島周辺の送電線は、新潟原発の停止で現在は停止されているため最近は雷が減っているという
※2　ネット上で不特定多数の群衆（クラウド）に資金調達（ファンディング）を呼びかける「クラウドファンディング」を自治体が行うもの。今回は「リターン」と呼ばれる返礼はない
※3　埼玉新聞6月15日・19日。なお、現在では深谷地区でも多くの品種が生産され、「味来」はそれほど多くない。先駆ブランドのためいまもイベントのタイトルになることが多い
※4　実際、上里町のあるとうもろこし農家から「深谷産だと売れるけど…」という声をきいた
※5　農業領域でのICT技術活用。深谷市はアグリテック表彰する「ディープバレーアワード」を展開中
※6　「地方からデジタルの実装を進め、新たな変革の波を起こし、地方と都市の差を縮めていくことで、世界とつながる」（内閣府）。6月議会では石川克正議員が質問のテーマにした

【取材・文】小林 真（こばやしまこと）　1963年深谷市上増田出身・在住。塾経営者、編集/ライターから深谷・ゆめ☆たまご~風土飲食研究会、本庄・NINOKURAなどで活動。2017年からNPOくまがや理事として熊谷市市民活動支援センター所長、2022年1月の補欠選挙で深谷市市議会議員に